

2023年1月15日 聖餐式説教

皆様はブラザーサン・シスタームーンという映画を御存知と思います。これは12世紀頃の修道者として有名な、アッシジのフランシスが修道生活を始めていくのを題材とした映画です。

このアッシジのフランシスは大変裕福な家庭に生まれました。当時かなりの家庭の人しか楽しめなかった、乗馬などで友達と楽しく遊び暮らしておりました。彼には貧しい人々のことなど心にはありませんでした。あるとき、彼は水辺でひっそり暮らしているハンセン病の人々に出会います。彼らの貧しさや見にくさを、フランシスは直視することが出来ませんでした。

戦争から病気で戻ったフランシスは、満たされない自分の生活を振り返り始めます。教会の礼拝、裕福な暮らし、貧しいものをしていたげている自分たちの姿、それを一生懸命に見つめたのです。そしてフランシスはついに、親からももらった財産も何もかも捨てて、修道生活へと踏み出していきます。自分が何でももらえるのは当たり前、貧しい人達が苦しい生活をするのは当たり前、貧しい人々に施しをするのはもったいないこと、お金にしても衣類にしても地位にしてももらえるのは当たり前、そこには感謝もなにもない。そういう自分から、もらうことよりささげること、自分のものにするのではなくて、すべての人と神様のものにする、そして与えられるものを感謝して受ける。そういう新しい自分への旅立ちでした。フランシスは廃墟となっておりましたサンダミアーノ聖堂の再建にとりかかります。

フランシスの友人たちは、フランシスの気が狂ったと思って、次々にサンダミアーノに出掛けていき、戻ってくるように説得しますが、説得されるのは彼らの方で、友人たちも戻って来ず、皆フランシスの仲間になっていきます。

寒い冬も休むことなく作業が続けられ、ついにサンダミアーノの再建が完成します。大勢の人々が共に喜ぶため、集まってきました。フランシスたちにとってもこれは大きな喜びでした。しかし、彼らのことを面白く思っていなかったグィード司教は、サンダミアーノを閉鎖しようと使者を遣わしてしまいます。使者に抵抗したフランシスの仲間の一人は殺されてしまいました。フランシスは自分たちのことを認めてもらうために、ローマ教皇のところに出掛けていきます。ローマ教皇との会見で、教皇の前で説教する気かと、一度は牢獄に入れ

られてしまいますが、ローマ教皇は、自分たちが富と権力の厚い殻をかぶっていることを恥じ、フランシスたちに真理を説くことを命じ、祝福して足に口づけします。フランシスたちは喜んで出掛けていきます。

この映画はフランシスの実話を元にしており、今日のカトリックのイエズス会と並ぶ代表的な修道会であります、フランシスコ会のスタートでもあります。

この物語は色々なことを私たちに語っておりますけれども、その中から、フランシスを呼び戻そうとした友達が、帰ってこなかったことを考えてみます。サンダミアーノで友人たちが見たものは、フランシスをはじめとする貧しい人々でした。自分たちには想像することも出来ないくらい貧しく、何もないところでした。遊びも楽しみも何もない、厳しい自然と重い労働があるだけでした。しかし、そこで働く人々は皆喜んでおりました。厳しい中にも笑顔が満ちていたのです。それは、どんなに裕福になっても、色々な人からどんなものももらっても得ることの出来ない、喜びの姿だったのです。友人たちはそれを見て、自分たちが今まで感じることも出来なかった喜びがここにあると知り、仲間に加わったのでした。

また、仲間に加わった一人があるとき大変悩んでおりました。フランシスたちの生活に魅力を感じながらも、彼は結婚することをあきらめられなかったのです。そんな彼にフランシスは、すべての人が修道者になってしまったら人類は滅びてしまう、結婚しないことがあなたを不自由にするならば、結婚すべきだと言い、彼を去らせます。フランシスにとって、すべてが感謝の日々であったのです。

さて、このお話しは、単なる物語でしょうか。過去の、特定の聖者の物語なのでしょう。そうではなく、これは教会の正しい姿を現しているのです。たとえ貧しくても、神様がくださるものを感謝して受け、主に仕えることが全き自由であることを示す、神様が望んでおられる教会の姿なのです。さきほどささげました本日の特祷には、「すべてをゆだねさせて下さい」という言葉がありました。すべてをゆだねる一つの姿が、ここにあると思います。私たちの、日々の信仰生活の中で、このようには生きられない様々な部分を、それぞれ抱えておりますが、神様が本当に喜ばれる信仰生活、本当の喜びを感じる信仰生活へ私たちが招かれていることを忘れたくないものです。